

# 「可哀想に、かおが、こすれて壊れるよ」を どう解釈するか

—— テキスト解釈としての『白鯨』翻訳事始め ——

---

藤本 幸伸

---

## はじめに

日本語翻訳で登場人物に「わたし、僕、おれ、わし」のどれを使わせるかで、人物イメージは変わる。イシュメールが「わたし、僕、おれ」を使うのに違和感はないが、「わし」には違和感がある。これに対し、圧倒的に「わし」イメージの強いエイハブの場合、「僕」と自称するのを想像するのは難しい。日本語の自称詞は、相対する人との社会関係や心理的距離感によって使い分けられ、それに伴って相手も「あなた、君、おまえ、貴様」と変わる。逆に言えば、日本語の自称詞は、社会関係や心理的距離に関係なく一つの主体として自らを示すことが得意ではない。しかし、英語の“I”は、相対する人との社会的心理的関係がどうであれ、常に変わらない“I”であり、安定した主体性を他者に示すことができる。主体性と関わる自称詞の翻訳の場合、翻訳者のテキスト解釈は翻訳読者の理解に影響を与えることになる。

これまで『白鯨』は、11人の翻訳者によって翻訳されてきた。<sup>1</sup> 翻訳を取り上げる場合、どの翻訳に誤訳が多いかという欠点探しに矮小化されがちである。また、翻訳が翻訳者の解釈である限り、読者は『白鯨』テキストを翻訳者の解釈を通して読まざるをえない。このように翻訳をネガティブに見ることもできるが、『白鯨』テキストに複数の翻訳があることで、テキストの複数の解釈を知ることができるというメリットもある。

以下、『白鯨』翻訳では何が問題となるのか、そもそも翻訳とは何かを確認する。また、テキストの解釈である翻訳を解釈する際、翻訳解釈者（本論文著者）の『白鯨』解釈の立場を示して翻訳の解釈基準を明らかにしておけば、その翻訳解釈は俗悪な誤訳指摘に失することはないだろう。本論は、物語の設定年代から『白鯨』は戦争と死をテーマとした物語だという立場を取り、イシュメールの死生観が投影される表現の翻訳から翻訳者のテキスト解釈を再構成して、その翻訳を解釈していくことにする。

---

<sup>1</sup> 11人の翻訳者は、阿部知二、田中西二郎、宮西豊逸、富田彬、野崎孝、高村勝次、坂下昇、幾野宏、原光、千石英世、八木敏雄である。

## 1. 『白鯨』翻訳問題：翻訳と解釈

2000年出版の千石英世『白鯨』翻訳は、読者に語りかける語り手イシュメールに「おれ」を使わせ、ビルダドやスターバックと話をするときには「わたし、わし、僕」などを使い分けさせる。従来の『白鯨』翻訳が、読者に対峙するときには「わたし」を使わせ、「おれ、僕」は会話に限定しているのとは明らかに異なる。「僕」と自称する場合と比べたとき、「おれ」と自称する者は、その者を精神的支配下に置きたい他者には「ままならぬ存在」として映るに違いない。千石版『白鯨』翻訳は、イシュメールが文化主流派やキリスト教正統派にとって「ままならぬ存在」であることを示すために、「おれ」と自称させていると想像できる。

このようなイシュメールはデイヴィッド・レイノルズ (David S. Reynolds) の *Beneath the American Renaissance* のイシュメール解釈に通じる。レイノルズによると、メルヴィルはイシュメールに「当時人気のあった急進派民主党的意識」を担わせていると言う。物語冒頭からイシュメールは「苛つきながら辺りを徘徊する、目敏く生意気で性根の悪いニューヨーク人で、いたずらを好み、澄ました仕事を嫌い、ワクワクする冒険に焦がれる」(543) バウワリーボーイズの浮浪者に仕上げられ、そのイシュメールが放つ「奴隷でないものがいようか」という言葉は、1850年代バウワリーボーイズのリーダー的存在であったマイク・ウォルシュを彷彿させるという。

Ishmael's declaration "Who aint a slave? Tell me that" would have had a familiar ring to those aware of the great b'hoy leader Mike Walsh, who by 1850 had become nationally famous for his argument that both Northern wage earners and Southern chattels were equally slaves of the capitalist system. The capacity of the b'hoy to be simultaneously virtuous and wicked is echoed in Ishmael's flexible spirit, as typified by his comment: "Not ignoring what is good, I am quick to perceive a horror, and could ... be social with it[.]" (543-44 下線は引用者)

バウワリーボーイズの意識のイシュメールであればこそ、「(キリスト教的) 善なるものを軽んじるわけではなく、わたしは恐怖(キリスト教的悪)を敏感に察知し、…なんなら恐怖といえることも辞さない」とキリスト教正統派を逆なでする言辭も放てる。破戒的イシュメールらしい台詞が<sup>4</sup>、"get off, Queequeg, you are heavy, it's grinding the face of the poor" (*Moby-Dick* 100) である。阿部知二を始めとして、おおよそ「かわいそうに、顔が潰れてしまうよ」と翻訳されてきたこの台詞を、千石版『白鯨』は「可哀想に、かおが、こすれて壊れるよ」(上

259)と翻訳する。だがこの翻訳に、渡辺利雄は『英語青年』（2001年4月1日）の「翻訳書書評」で手厳しい批評を加え、翻訳とは何かと改めて考えさせることになる。

泥酔した水夫の顔の上に Queequeg が座り込む場面である。原文では “It’s grinding the face of the poor.” 千石訳は、ただ「可哀相に（ママ）、かおが、こすれて壊れるよ」となっている。この “grind the face(s) of the poor” は、聖書に由来する。どの引用句辞典にも出ている、注を必要としないほど有名な表現なのである。既訳も似たような訳をしている。しかし、ここには状況そのものも滑稽だが、さらに、全くの異教徒の Queequeg に Ishmael が聖書を引き合いに出して説教をするという滑稽さを感じられ、それを生かす工夫があってしかるべきところだろう。(60)

この批評に対し、千石は同年5月号の『英語青年』で次のように応答する。

21章、聖書からの引用 <grind the face of the poor (s)> がつかめていない、この個所、聖句であるがゆえの皮肉めいた発言なのに、訳ではその皮肉が利いていないとのご指摘です。そもそも引用句辞典すら引いていないのではありませんかというご指摘もありますが、しかし、どうやらそれはやっているようです。手元の引用句辞典には引いた痕跡が見えます。ならば、なぜこういう結果をまねいてしまったのか。これは、尻を顔というクイークエグの発言の面白さをともかく生かしたい、そう思ったのだとおもいます。(51)

千石は自分の翻訳は、「明治時代の翻訳草創以来の問題、二葉亭四迷が悩みぬいて以来の問題」である「1元語（ママ）1訳語」（51）の等価性について批判検討した上で選んだ「解釈訳」だと言う。この翻訳論争は、同誌6月号で柴田元幸が千石訳の技巧を称賛する「翻訳はいかにあるべきか」に引き継がれていく。柴田は、この翻訳論争は、「原文と翻訳文の長さが等価であるとき、原文の持つ面白さは翻訳文でも等価となる」という翻訳観と、「文章の長さは等価でなくとも、翻訳文で原文の面白さを再現できればそれは等価とみなしてよい」とする翻訳観との違いにあり、前者に立つ渡辺の千石訳に対する要求は「厳しい」と言う。柴田は、千石訳「可哀想に、かおが、こすれて壊れるよ」について、「間違いなく、Kの音を多用してまさに grinding な響きを生じさせ、滑稽さを醸し出している千石訳の技巧を賞賛したことだろう」（75）と言い、次のように続ける。

渡辺氏の書評は、これが聖書に由来する表現であることが訳文に表われていないことを指摘し、「全くの異教徒の Queequeg に Ishmael が聖書を引き合いに出して説教をするという滑稽さ」を生かす工夫があつてしかるべきだと論じている。

ここでも、要求の厳しさの違いははっきりしている。僕は、とにかくにも滑稽さが「量」としては再現されていることを賛嘆し、渡辺氏は、聖書が場違いに出てくるという可笑しみが再現されていないことを問題視している（これに加えて、おそらく自明なので氏は問題にしていないのだろうが、比喩と化している表現が字義どおりに使われることから生じる可笑しみの再現、という問題を考えてもいいかもしれない）。

ここでもまた、僕は滑稽ささえ再現されていない訳文を想定しそれと比較しているのに対して、渡辺氏は滑稽さが原文と同じ形で再現された訳文を想定しそれと比較している。（75）

この『白鯨』翻訳をめぐる問題は、翌 2002 年 1 月号「特集：『白鯨』ウォッチング」で須山静雄と千石英世の「『白鯨』翻訳をめぐる」という対談にまで発展していく。

第 21 章の聖書からの引用が聖書からの引用だと英文読解の過程で分かることと聖書からの引用だと分かるように翻訳することでは、読者の『白鯨』理解は変わるだろう。聖書を 50 頁ごと開いて眺めることしかできないクイークエグ（第 10 章）は、英語聖書は読めない。もちろん“grind the face of the poor”が英語聖書からの引用だともわからない。相手が分からないと分かっているのに、あえて聖書から引用するイシュメールは、クイークエグに対してパウワリーボーイズ的意地悪を仕掛けている。むしろこの聖書の引用はクイークエグに対してというよりも、『白鯨』読者、特に異教徒にキリスト教伝道活動を展開する長老派に向けたイシュメールの揶揄とみなせるはずだ。

それではこの箇所をどう訳せばよいのか。2004 年の八木敏雄『白鯨』翻訳は、「貧しき者の顔を白でひきつぶすことなかれ、と聖書にあるぞ」（上 268）と訳し、更にこの箇所に、「日本聖書協会の新共同訳『イザヤ書』3：15」と注を付す。渡辺・千石・柴田の『白鯨』翻訳論争を参考にしての翻訳だろう。だが、少なくとも 2 つの問題が残る。一つは、八木翻訳は日本聖書協会の新共同訳を拠り所とする点（2018 年の新しい共同訳では当該箇所は改訳されていないが、もし改訳されていれば、聖書だと分からせるために八木翻訳も改訳を余儀なくされる）、もう一つは、「聖書にあるぞ」と種明かしし、クイークエグに聖書からの引用であることを分かせてしまう点だ。上の三者の『白鯨』翻訳論争にもあったように、

聖書からの引用だとはクイークエグには分らない（イシュメールは分らせるつもりもない）が、読者には分かるというところにこの場面の可笑しみがあるはずなのだが、八木翻訳ではその可笑しみを犠牲にすることになる。さらに言えば、イシュメールのキリスト教正統派を揶揄するおふぎけぶりやクイークエグに対する意地悪さも失われてしまう。クイークエグは、自分の言った「顔」を受けて、イシュメールは「顔」と言っている、だがなぜ「貧しき者」と言うのかまではわかっていない。八木翻訳の「と聖書にあるぞ」は「…と聖書のことばを混ぜて言った」とし、注で『イザヤ書』からの引用であると示すのが妥当だろう。

イシュメールが『イザヤ書』を引用してクイークエグを嗜める箇所には渡辺が拘るのは、千石を含めそれまでの『白鯨』翻訳が聖書からの引用を使う可笑しみを翻訳していなかったからであり、また渡辺が翻訳を粗上に上げたことでこの箇所の読者の理解も深まったはずで、その意味で既存の出版翻訳を解釈することは意義あることであろう。<sup>2</sup>

文化主流派を揶揄することを厭わないイシュメールだからこそ、エイハブと白鯨に仮託された善と悪の宇宙論的闘いというナショナル・ストーリーを冷めた口調で語ることができる。この語りの距離感をイシュメールは、『白鯨』テキストの前半部分（特に第9章、第10章、第18章、第21章）で形成する。この冷めた口調は、語り手イシュメールが1850年あるいは1851年の意識で、自らが遭遇したエイハブと白鯨との闘いを回顧していくことから生まれる。イシュメールのキリスト教正統派に対する批判的スタンスを、第18章のビルダドへの応答で確認しておこう。

ビルダドが契約に際しクイークエグがキリスト教徒であることに拘る場面に、イシュメールのキリスト教正統派に対するシニカルな態度が現れる。ところで、このイシュメールのビルダドへの返答だが、ジョン・ブライアント（John Bryant）はテキスト校訂の問題、イシュメールの声とその声を書き記す活字の問題として取り上げる。アメリカ版『白鯨』では小文字である、以下の引用文の最初の first を、ノース・ウエスタン版は大文字の First としている。このテキスト校訂に対して、ブライアントはイシュメールの意図が崩れてしまうと批判する。

“Why,” said I, “he’s a member of the First Congregational Church.” Here  
be it said, that many tattooed savages sailing in Nantucket ships at last

<sup>2</sup> 聖書からの引用については、チャールズ・ファイデルソン注解のポップズメリル版、ハロルド・ビーバー注解のペンギン版、ヘンドリックス版、ノース・ウエスタン版、更には聖書に詳しい坂下昇翻訳のいずれにも注釈はない。2001年のノートン版第2版、2007年のロングマン・クリティカル版で初めて注釈がつく。

come to be converted into the churches….

“I don’t know anything about Deacon Deuteronomy or his meeting,” said I, “all I know is, that Queequeg here is a born member of the First Congregational Church. He is a deacon himself, Queequeg is.”

“Young man,” said Bildad sternly, “thou art skylarking with me — explain thyself, thou young Hittite. What church dost thee mean? answer me.”

Finding myself thus hard pushed, I replied. “I mean, sir, the same ancient Catholic Church to which you and I, and Captain Peleg there, and Queequeg here, and all of us, and every mother’s son and soul of us belong; the great and everlasting First Congregation of this whole worshipping world; we all belong to that; only some of us cherish some queer crotchets no ways touching the grand belief; in *that* we all join hands.” (87-88 下線は引用者)

イシュメールはクイークエグがキリスト教に改宗していないことを承知しているはずなのに、ビルダドにクイークエグは“a member of the First Congregational Church”と告げる。ビルダドから本当に「ドウトロノミ・コールマン執事のあの“First Congregational Church”か」と詰め寄られると、「あなたやわたし、ピーレグも属している、古よりあまねく続く教会、この神を崇拝する世界全部にとっての偉大で永遠に続く第一の教会に属しているという意味です」とはぐらかす。このイシュメールのいかさまめいたはぐらかし、またビルダドも怪しいと察しつつ、あえて言挙げしないこの対応の場面で、“he’s a member of the First Congregational Church”とfirstを大文字にすれば、クイークエグを改宗したと言いくるめようとするイシュメールの言葉遊びの不敬さは消えてしまうだろう。音声ではfirstとFirstが区別できないゆえに、敬虔なビルダドはクイークエグが「会衆派第一協会」の教会員だと錯覚する。だが、活字でfirstと小文字にしておけば、イシュメールがビルダドを煙に巻こうとして意図的にこのような言葉遊びをしたと読者にはわかる。

このような不敬なはぐらかしをするイシュメールの、キリスト教正統派に対する破戒的スタンス、あるいは全能の神が何故人間の苦しみを放置しておくのかという問いへのキリスト教正統派の回答への懐疑的スタンスは、第9章「マプルの説教」、第10章「真の友人」で明らかである。神の過酷な命令に背き罰せられても黙して悔い改めるヨナのように悔い改めること、また神の水先案内人である自分の使命は虚偽の世界に対して真実を説くことだと説くマプルは、神の意志の絶対的「正しさ」を前提とし、人間の苦しみへの神の沈黙には触れない。そのマプ

ルの説教を聞いた直後の第10章で、イシュメールは神の意志を実践するのが信仰深き長老派教徒だと殊勝なことを言いつつ、神の意志ならぬクイークエグの意志を実践して、自ら偶像信仰者になると宣言する。この連続する場面が示すように、イシュメールは、『白鯨』テキストの前半部分で、キリスト教正統派信仰、それを信じることで不幸を乗り切ることができた伝統的キリスト教世界観に対して訣別を宣言する。人間の不幸に無頓着な世界に対して、あるいは人間の苦に無関心な神に取り成ししようとしないうキリスト教正統派に対して倫理的距離を置き、かといって絶望やシニカルな諦観に甘えるでもない。信じることでもう一度生きる意欲が湧き上がる信仰の安心感が消え去った世界で、それでも生きていく意味を見つけようとするのがイシュメールである。そうであってみれば、語り手イシュメールがクイークエグに対しても、エイハブに対しても同様に心理的距離を置くのは当然であろう。イシュメールを表向きは未熟に振る舞うが、知的でシニカルで言語能力に長けた若者と解釈すれば、イシュメールの自称詞は「わたし」がふさわしいはずだ。

## 2. 翻訳について

ここでそもそも翻訳とはなにかについて、簡単に触れておく。日本は漢文訓読法なる翻訳方法を編み出し、中国から先進文化を受容してきた。漢文訓読法は、統辞法の異なる漢文（中国の古典文章語）を曲がりなりにも日本語の統辞法に変換する文化移植方法である。漢文訓読法を使えば、中国語の語順のままで原文が理解できるだけでなく、素読で漢文を記憶すれば、いつでも元の漢文を復元することもできる。漢文訓読法によって、日本人は漢文を中国語の語順のままの原文で移植してきたのだ。

莊子の「胡蝶の夢」を例にとろう。これは、夢の中でひらひらと優雅に飛ぶ蝶となった自分に満足するが、夢から覚めると、自分は莊周のままである、自分が夢の中で蝶になったのか、蝶の夢の中で自分が蝶になったのか判然としないが、必ず区別はあるはずだ、という詩だ。この詩の最後の二行「周与胡蝶、則必有分矣。此之謂物化」はこの語順のまま、漢文訓読で「周と胡蝶とは、すなわち必ず分有らん。此を之れ物化と謂う」と音読する。原文の「物化」という概念は「本質的には一つであるものが様々に変化すること、事物の変化」という訓詁注釈で理解しておけば、漢文訓読しながら、中国語の語順のままで原文を理解することができる。この漢文訓読法的理解が可能なのは、日本語では原文の漢字概念を漢字のまま日本語に移植可能なため外来の概念も理解できると錯覚するためである。

漢文訓読法的理解の特殊性は “The SDGs cannot be achieved without the



realization of child rights.”に当てはめるとよく分かる。この英文に漢文訓読法的に日本語統辞の順番を番号付けし日本語に変換すると、「エスディーゼはチャイルドライツのリアリゼーションなしにはアチーブできない」となる。カタカナ語「チャイルドライツ」は、英語発音に近いほど原語 child rights を復元しやすい。また、without に当たる訳語も、without を復元しやすいように「一原語一訳語」にしておけば、より正確に英語を復元できる。このような迂遠な作業の漢文訓読法的理解では、原文を復元できる訳が「良い」訳として評価される。

明治初期の日本人は、この漢文訓読法を英語文に応用し英文訓読法を開発した。だが、漢字概念とは異なり、アルファベットによって表される概念はアルファベットのままでは日本語に移植できない。そこで漢字を駆使してアルファベット概念を「一原語一訳語」的漢字に変換し、日本語の統辞法に無理やり落とし込む英文訓読法を作り上げた。上のカタカナ混じり文のカタカナ語を漢字に置き換えれば、「持続可能な開発目標は、子供の諸権利の実現なしには達成できない」と英文訓読できる。明治30年以降登場する小野圭次郎や山崎貞二の英語構文集はその通俗版である。

アルファベット概念を漢字概念に無理やり変換する英文訓読法では、原文を復元しやすい訳が推奨される。シェイクスピアなどの翻訳を手掛けた野上豊一郎が、『繙譯論』の中で“The world is all before us.”は「世界はみなわれわれの前にある」、「I would do anything before that.”は「僕はそのことより先にどんなことでもやろう」という訳で十分で、「それでわからない奴にはわからないでもない」「原文にそれだけのこときり言ひ表してない」のだし、「さういへば西洋人にはわかるのだから、日本人にだって慣れればわかるやうになる」(226-27)と言うように、英文訓読法では原文を復元しやすい「一原語一訳語」的直訳に価値が置かれる。この「一原語一訳語」なる直訳は、その後、大学受験の英文和訳問題を通じて「正しい」翻訳法としてエリート知識人の間に浸透していく。渡辺と千石・柴田の翻訳観の違いは、保守的エリート知識人とリベラル・エリート知識人の翻訳観の衝突と理解してよいだろう。

### 3. 『白鯨』の物語設定年代：戦争と死

物語の設定年代から『白鯨』は戦争と無辜の死をテーマとする物語という立場を、また翻訳に関しては「一原語一訳語」ではない立場を本論では採ることにする。第1章でイシュメールは自分の捕鯨出帆の年を、アメリカ大統領選挙戦と1842年に終わるアフガニスタン戦争の間に置く。明示的に示されない大統領選挙年を、ヘンドリックス版、ハロルド・ビーバー編集のペンギン版、ノートン版は1840年の大統領選挙戦に設定する。選挙戦と戦争の間に挟まった1841年は、



メルヴィルが捕鯨船で航海に出た年と重なることから、イシュメールの出帆もまた 1841 年だという解釈である。ロングマン版は民主党が二分してホイッグ党に敗れる 1848 年の選挙戦を候補としてあげる。メキシコ戦争で獲得した今の国土の約三分の一に相当する広大な土地を奴隷州とするかどうかでアメリカが二分していくことを、その根拠とするのだろう。ヘンドリックス版はメルヴィルの兄ガンズボートが選挙で活躍したことをもって、1844 年のジェームズ・ポークの選挙戦を候補としてあげる。

メルヴィル自身、ホーソンに宛てた手紙で自分の精神的成長は 25 歳からだと言うが、メルヴィルの 25 歳は 1844 年だ。捕鯨船に乗った年と精神的成長開始の年を比べた場合、作家にとっては精神的成長が重要であるに違いない。だが、それでは 1844 年となり、1841 年としていたイシュメール出帆年とズレが生じる。メルヴィルの伝記的事実を持って、イシュメールの出帆年を決定するのは無理があるし、そもそもイシュメールの出帆年とメルヴィルの伝記的事実とを重ねる必要はない。

イシュメールが自分の出帆をわざわざ大統領選と戦争の間に置いたとすれば、大統領選挙に勝利する大統領は何らかの形で戦争に関係するにちがいない。1840 年代で戦争と関わる大統領は、オレゴンの国境を確定し、メキシコ戦争の賠償で得たカリフォルニアを含む広大な土地をアメリカの国土に組み込んだジェームズ・ポークである。この領土獲得が、自由州と奴隷州のバランスを崩すことになり、新逃亡奴隷法や南北戦争につながっていく。そもそも海に出ることはピストルと弾丸の代わりと言うイシュメールにとって、アフガニスタン戦争とメキシコ戦争という二つの戦争と死に自分の出帆に関連させるのは自然ではないか。

『白鯨』は、第 1 章から第 25 章までがイシュメール、第 28 章から第 52 章まではイシュメールの白鯨論を挟みつつエイハブが中心、第 55 章から第 105 章までは鯨の博物学を披露するイシュメール、第 106 章から第 135 章はエイハブを中心とする白鯨との闘いと大雑把に分けることができ、物語の進行に応じて登場人物のイシュメールは後退し、語り手イシュメールは物語世界に対して回顧的批判的スタンスを強めていく。回顧的批判的語り手イシュメールは、ナンタケットの人々が世界の海の殆どを掌握していると語る第 14 章で “Let America add Mexico to Texas, and pile Cuba upon Canada; let the English overswarm all India” (64)、また、所有権こそが法のすべてであると言って、仕留め損なって漂流した鯨の所有権は早く取ったものにあるという第 89 章で “What at last will Mexico be to the United States?” (398)、第 111 章でも穏やかに見える太平洋には海中には船員たちの魂が沈んでおり、その波が “the new-built Californian towns” (482) にも打ち寄せるのだと、幾度もメキシコ戦争に言及する。回顧的批判的語り手の

イシュメールはエイハブと白鯨との宇宙論的戦いとメキシコ戦争やアフガニスタン戦争とを重ね合わせていると考えれば、『白鯨』テキストは戦争と死を巡る物語だと言ってよいだろう。

本来なら突然訪れる不幸や悲しみに何らかの意味を与えて、生きにくい人生を少しでも生きやすくする意味を人々に提供するのがキリスト教正統派の役割であつたはずだが、その本来の役割が機能不全に陥っていると、イシュメールは気炎を吐く。では、キリスト教正統派とは誰か。『白鯨』には、ビルダドやピーレグそしてエイハブのクエーカー、イシュメールの長老派、マブルのメソジストと、様々な教派が登場する。また、「パートルビー」や「二つの塔」に登場するトリニティ教会やグレイス教会、『ピエール』のフォールスグレイブが属する教派はエピスコパルである。

教会資産の多い教派は社会の上位層に属する人々を多く抱え、政治・経済・文化の各方面で発言権を持つキリスト教主流派（正統派）と見ることができる。1850年の人口統計で人口の多い、ニューヨーク州、ペンシルベニア州、マサチューセッツ州、オハイオ州の4州の教会資産はアメリカ全体の教会資産の約56%を占め、その大部分を、長老派、メソジスト、エピスコパルが占める。つまり、イシュメールが揶揄し闘いを挑もうとするキリスト教正統派とは、長老派・エピスコパル・メソジストと見てよい。<sup>3</sup>

キリスト教正統派は、遺族が経験する戦争あるいは捕鯨事故による死の悲しみに向き合おうとしていないと、イシュメールはたった一人でキリスト教会全体を相手取って戦いを挑む。エイハブが“that unexampled, intellectual malignity” (183) という知的悪意の権化である白鯨に挑むために“I am madness maddened!” (168) と自らの狂気をバージョンアップさせるように、イシュメールは鯨が象徴する“the ungraspable phantom of life” (5) についてのあらゆる知識を身につけ知の巨人と化し、自然と死の謎を巡る壮大な闘いに挑む。知の巨人イシュメールのキリスト教正統派への闘い方を、第7章の翻訳を通して確認していくことにする。この章は、マブルの説教とクィークエッグを心の友と語る場面（第8章、第9章、第10章）の直前にあたり、イシュメールの死に対する向

<sup>3</sup> 次の表は、*Statistical Views of the US* (1854) を基に作成した (132-40)。単位はドル。1850年時点の教会の総資産額は87,446,371ドルである。

	州総資産	長老派	メソジスト	エピスコパル	バプティスト	カトリック	会衆派
ニューヨーク	21,219,207	4,356,606	2,886,043	4,110,824	2,253,050	1,569,875	779,304
ペンシルベニア	11,586,315	2,585,250	1,726,638	1,483,700	811,395	1,084,204	データなし
マサチューセッツ	10,206,184	82,500	934,380	697,250	1,460,350	477,500	3,279,089
オハイオ	5,793,099	1,389,699	1,545,831	367,425	621,730	763,307	207,880
4州の合計	48,804,805	8,414,055	7,092,892	6,659,199	5,146,525	3,894,886	3,486,969

き合い方が明快に現れる箇所だからだ。

#### 4. イシュメールの死の向き合い方と翻訳

第7章では、マブルの教会に入ったイシュメールは、教会の壁にかけられた墓碑を目にする。だが、中に遺灰も骨も入っていない墓碑は、航海で夫を亡くした未亡人たちの癒えることのない悲しみをかえって深めるだけだと言う。

Oh! ye whose dead lie buried beneath the green grass; who standing among flowers can say—here, *here* lies my beloved; ye know not the desolation that broods in bosoms like these. What bitter blanks in those black-bordered marbles which cover no ashes! What despair in those immovable inscriptions! What deadly voids and unbidden infidelities in the lines that seem to gnaw upon all Faith, and refuse resurrections to the beings who have placelessly perished without a grave. As well might those tablets stand in the cave of Elephanta as here. (36)

「我が愛しき人はここに眠る」という墓碑は、「ここに眠る」遺灰がないだけに死んだ身内の魂の安らぎを願う善良な遺族には空々しく響く。信者の篤い信仰心に付け込んで、無神経にも信者の悲しみを癒やすことのない墓碑を掲げる、とイシュメールは気炎を吐く。イシュメールの言葉遣いは、ある言辞と否定辞を被せた同義語とを組み合わせることで、キリスト教正統派が掬い取ることをしない遺族の悲しみを、読者に前に開示して見せる。“deadly voids”を例にしておこう。この voids は、海で遭難し遺灰や遺骨がないとわかっていながら、白々しく書かれた「我が愛しき人はここに眠る」という言葉が「虚しい」だけでなく、悲しみの癒えない者にとってこの言葉の「空虚さ」は deadly (死を思い出させる)、つまり亡くなったものを思い起こさせ、死の悲しみを再び経験させる。また、教会は信者には言動に慎重であれと説教しておきながら、自らには放縦さを許す。その無神経さを“unbidden infidelities”の unbidden は意味する。もし信者の悲しみに寄り添っていれば、このような不謹慎な言辞を吐くことはあるまいと、イシュメールは言うのだ。

「自由・平等」という言葉は、絶対的な「善」の響きを持つ。文化主流派がこの言葉を使えば、更に「善」の強度は高まる。だが、イシュメールはその「善」からこぼれ落ちる者がいると言う。文化主流派が良かれと使う「善」の言葉はその落語者の心の傷に更に広げるものでしかない。この「善」的言葉の抑圧作用あるいはその抑圧作用を備えたナショナル・ストーリーを、ありとあらゆる知を駆

使して検証するイシュメールは、決して暴力的でなく、かと言ってイノセントでもない。文化主流派が得々として使う「善」の言辞の一端を検証し、「善」の言辞に否定辞を冠して不都合・不条理な言辞に変換し、独善の言辞の無意識（陥穽）を開示してみせる。このシニカルなロジックやレトリックが、イシュメールの文化主流派への挑み方である。

この後、マブルは改悛の見本としてのヨナの物語と神の水先案内人としての使命を高らかに語るのだが、その説教を、キリスト教正統派の遺族に向けた言辞の心なさへの揶揄と、神の意志の実行がキリスト教徒を蛮族に改宗させるという破戒的言辞の間に置き、語り手イシュメールはマブルの説教を骨抜きにしていく。このような『白鯨』解釈の立場から、イシュメールのキリスト教正統派への揶揄がどのように翻訳されてきたかを見ておく。

1972年の野崎孝翻訳の「御身らはここの人々の胸に蟠る荒寥の想いを知らぬ」(50)という言葉遣いは、人間の生あるいは信仰が孕む根本的矛盾を浮かび上がらせはするが、遺族に寄り添って心無い言辞を発するキリスト教正統派への揶揄は含意していない。千石翻訳は、「ここに我がいとしきものは眠れる」(125)と発言する者をキリスト教正統派とみなすともとれるし、遺族の悲しみを理解しない者たちともとれる。だが、「恐るべき空白！碑文を凝視していると、誰にいわれるのでもないのに不信心がわきあがってくる。そして信じようとする心がすみずみまで食い荒らされて行く」(125-26)という言葉からは、遺族の側に立って空虚な言葉が信心深き者の信仰心を「すみずみまで」失わせていくと、正統派に対する批判的響きを漂わせる。最後に、「まさにここに眠ると、ことあげしうる者たちよ」とする八木翻訳は、「なんたる虚無のきわみ、なんたる不信へのいざない！」(129)という言葉遣いから推測できるように、千石翻訳よりもはっきりとキリスト教正統派への批判を強めている。

イシュメールは、死について、死の弔い方について徹底的に拘る。死の悲しみ方は“insular and incommunicable” (34)なものであり、個の死とその悲しみはキリスト教正統派のナショナル・ストーリーに回収・還元できるものではないとイシュメールは考える。こう解釈する翻訳解釈者からすれば、この箇所はイシュメールの言辞の破戒ぶりを強調する翻訳がふさわしいと思える。優れたメルヴィル研究者による同一テキストの微妙に異なる解釈を『白鯨』翻訳は記録している。『白鯨』翻訳の解釈は、新たな『白鯨』テキスト解釈を誘うと言えるだろう。

【参考文献】

- Bryant, John. "Rewriting *Moby-Dick*: Politics, Textual Identity, and the Revision Narrative." *PMLA*, vol. 125, no. 4, 2010, pp. 1043-60.
- DeBow, J. D. B. *Statistical View of the United States, Embracing its Territories, Population-White, Free Colored, Slave-Moral and Social Condition, Industry, Property, and Revenue; the Detailed Statistics of Cities, Towns, and Counties*. A. O. P. Nicholson, 1854. *Hathi Trust Digital Library*, <https://catalog.hathitrust.org/Record/001885967>.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. Edited by Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle, the Northwestern UP and the Newberry Library, 1988.
- 一, 野崎孝訳 『メルヴィル 白鯨』 新装世界文学コレクション36 中央公論社 1994(1972)
- 一, 千石英世訳 『白鯨 上下』 講談社文芸文庫 講談社 2000
- 一, 八木敏雄訳 『白鯨 上中下』 岩波文庫 2004
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Harvard UP, 1988.
- 柴田元幸「EIGO CLUB 翻訳はいかにあるべきか」『英語青年』2001年6月号 pp. 75-76
- 千石英世「EIGO CLUB 本誌4月号の「翻訳書書評」について」『英語青年』2001年5月号 pp. 122-23
- 野上豊一郎『翻譯論—翻譯の理論と實際—』岩波書店, 1938
- 渡辺利雄「翻訳書書評 ハーマン・メルヴィル著, 千石英世訳『白鯨』(上・下)」『英語青年』2001年4月号 pp. 59-61

How Should “it’s grinding the face of the poor”  
be Translated into Japanese?

— Preliminary Studies to Interpreting the Translations of *Moby-Dick* —

---

Yukinobu Fujimoto

---

The Japanese language has a variety of personal pronouns, such as “わたし, 僕, おれ, わし; あなた, 君, おまえ”. Japanese people choose personal pronouns, based on the social relationship with and the psychological distance to the person they are addressing. When you choose “わたし” as a personal pronoun addressed to a superior or a stranger, you are showing respect or being docile to the person. When you speak to your superior using “おれ”, you are showing yourself as a defiant person. The availability of a selection of personal pronouns in Japanese allows a speaker to present to others different aspects of self-perception or subjectivity such as displaying an attitude of docility or defiance. In contrast, personal pronouns in English show the same and unchanging self to anyone, whether the person addressed is a king or a family member. Both linguistically and culturally, there are significant differences between Japanese and English in terms of the meaning and variety of personal pronouns available to a speaker.

When a text written in a foreign language is translated into Japanese, the translator’s understanding of the text determines the choice of personal pronoun for the main characters and eventually how characters will behave in the translated text. When Hideyo Sengoku translated *Moby-Dick* in 2000, he not only represented Ishmael as a slightly cynical and defiant young man, but also provocatively deviated from what was then thought to be a good translation. In 2001, Toshio Watanabe, a professor emeritus at Tokyo University, criticized Sengoku’s translation severely, which in turn generated a serious discussion about the nature of translation itself.

This argument calls to mind a traditional method of translating Chinese classics into Japanese, 漢文訓読. This translation method adds 訓点, guiding marks like レ, 一二三, and ヲ, to a Chinese text and forcefully changes the Chinese syntax into a Japanese one. By doing this, the original text can be read aloud with its word order unchanged. The reason why such a technically transformed, but still difficult-to-understand, Chinese text seems to read like quasi-Japanese is that Japanese Kanji can retain parts of their Chinese



meanings intact in the Japanese language. In this translation method, word-for-word translation is indispensable for understanding the Chinese classics. If the original Kanji or Chinese character of the Chinese classics is freely translated into a different word or phrase meaning the same idea, the original text cannot be restored and its interpretation is irrevocably altered and diversified. In this idiosyncratic translation tradition, word-for-word translation has been highly valued.

Sengoku's translation of *Moby-Dick* violently breaks this long-cherished tradition and provokes an argument about translation. To evaluate his innovative translation, it is necessary to clarify Ishmael's stance toward the world he narrates. It can be inferred from Ishmael's sailing year that *Moby-Dick* is a story told by Ishmael about war, death and the grief of bereaved families. He sets his sailing year between a presidential election and a bloody battle in Afghanistan in 1842. The president who won the election is thought to be James K. Polk, who would later wage a war against Mexico and acquire one-third of what is present-day US land. This territorial expansion was a precursor to heightened tensions over the issue of slavery which resulted in the fugitive slave act of 1850 and culminated in the Civil War. Ishmael consciously relates what he experiences on the *Pequod* to war and the grief it incurs.

Ishmael, who wonders why people suffer from disastrous results they did not want, criticizes the dominant Christian churches in 19<sup>th</sup> century America. Ishmael feels that the churches ignore their proper duty of mitigating the unceasing grief of the bereaved families of dead sailors. The "insular and incommunicable" grief of bereaved families is too much for the families to cope with by themselves. Impatient with the uncaring, inconsiderate churches, Ishmael tries to relieve this grief by accumulating knowledge about whales which he thinks symbolize "the ungraspable phantom of life," in other words, the mystery of death. His sarcastic attitude toward the dominant churches is evident in Chapters 7 to 10. After carefully examining the meaning which Ishmael intends to convey in the phrase "deadly voids and unbidden infidelities" in Chapter 7, it can be said that the translations of the phrase should ideally emphasize the insularity and incommunicability of the unceasing grief of the bereaved families and the blindness and cold-heartedness of the churches toward them.

*Yamaguchi University*